

## Editor's Note

### 講評

今年度は、卒業論文を提出する資格をもつ学生数は3名でしたが、めでたく、全員が期日に間に合うように提出してくれました。昨年度、ボクの人生で初めて卒論ゼロを経験した後だけに、卒論が出ることの喜びと、安堵感はひとしおのものがありました。

石田雅さんは、プレ卒に引き続き、子どものペット化とペットの子ども化についての研究をまとめました。子どものペット化とペットの子ども化に関する尺度を作成するという作業を行った後、それを実際に使用して、ペット化と子ども化の背景にあるものが何であるかについて、アニミズム的な心性に焦点をあてて検討するための調査を行いました。調査結果から得られた知見は多岐に渡りますが、主要な点を挙げると、ペットの子ども化と子どものペット化においては、それぞれにおいて、それを規定する独自の心的過程が見出されるものの、必ずしも両者に共通する心的過程は認められなかったこと、アニミズム的な心性はペットの子ども化には関係があるが、子どものペット化とは無関係であること、などが明らかとなりました。研究の第1段階である尺度構成そのものも大変な努力と時間が求められる研究でしたが、さらにそれを使って、この現象の背景を探るところまで進めた点で、卒業研究としては高く評価されます。

登坂美咲さんも、プレ卒に引き続き、人前でスピーチを求められた時などのいわゆる“あがり”の現象についての研究をまとめました。プレ卒ではいわゆる漸進的筋弛緩法が“あがり”の抑制に有効であるかどうかを検討していましたが、卒論ではさらに一步を進めて、参加者に、スピーチ中にさまざまな顔面表情をさせて、どんな表情を作らせることがスピーチ不安の抑制に効果があるかを検討しました。その結果、口角を上げるなどのいわゆるポジティブな表情をさせた場合の方が、しかめつらをさせるなどのネガティブな表情をさせるよりも、スピーチ終了後において、自己のスピーチに対する評価が高くなることなどの結果が得られています。スピーチ時の不安や“あがり”が、どのような内外の諸要因によってもたらされるかの研究は多数存在する一方、それを抑えることのできる、誰もが取れる方略を探索してきた2年間の研究努力の結果、きわめて価値の高い知見に到達し得たと思います。

横山健介くんは、プレ卒では、保育園児の遊び、特に遊びの場所の特性が園児の社会的行動の現れ方や、遊びの発達・構造化のされ方とどのような関係を持つかに関して、行動観察によって検討をしました。卒業研究では、保育園児2名でペアを構成し、その2人組に対して、園庭の砂場内に埋められたスーパーボールを探し出す課題を与えています。2人組の年齢を年少から年長の3条件、男女の組み合わせ条件を3条件（男女、男男、女女）に加えて、2名組に二人で協力して課題を行うように指示した場合と、二人の間で競争させる場合との比較を、課題遂行中の子どもの行動観察に基づいて行なっています。その結果、課題遂行の成績には年齢の効果が認められ、また、課題解決に関連する言葉の交わし合い、すなわち「関係発語数」については、5歳児の方が3歳児よりも多いこと、また男児だけの2人組の方が男女の2人組よりも多いことが見出されています。さらにはこの「関係発語数」は、協力群においては、女児だけの2人組に発語数が多く、競争群では、男女2人組に多いことが見出されています。幼児の協力行動や競争的行動の行動観察、また2人組の性別組み合わせによる行動の相違について、きわめて独創的な結果を得ることができています。

プレ卒研究論文として提出された3名の論文も、たいへんに野心的で独創的なものでした。堀江隆太くんは、ラバーハンドイリュージョン（RHI）と共感性の関係について検討を行なっています。このテーマはなかなか結果を得るのが難しいのですが、比較的クリアなデータとなりました。また、心理系の研究者が行うRHIの実験の多くが触刺激として筆先などを用いているのに対して、電気的な振動子を用いるなど、実験遂行手続の洗練化、高度化の工夫がなされている点も注目に値します。延藤美幸さんは、音声に含まれる感情の認知について、今後の研究の基礎となるデータを収集する実験を行いました。6つの基本感情を含む音声刺激に対する感情同定課題の結果は先行研究とほぼ一致したものとなり、実験制御が有効であったことが確認されていますし、感情評定課題においては、今後の展開への足がかりとなるような興味深い結果が得られています。久万歩奈美さんは、虚記憶がオノマトペにおいて生起するかどうかの検討を行いました。これは内外に先行研究が全くない独創的な試みで、なおかつオノマトペでの虚記憶の有無は、虚記憶のメカニズムの根底に関わるよう重要な知見を与えるものとなる可能性があります。しかも結果を見ると、虚記憶が生じる可能性が大きいことが読み取れますので、今後の研究成果が期待されるところです。

（2016年3月15日 山上 精次）